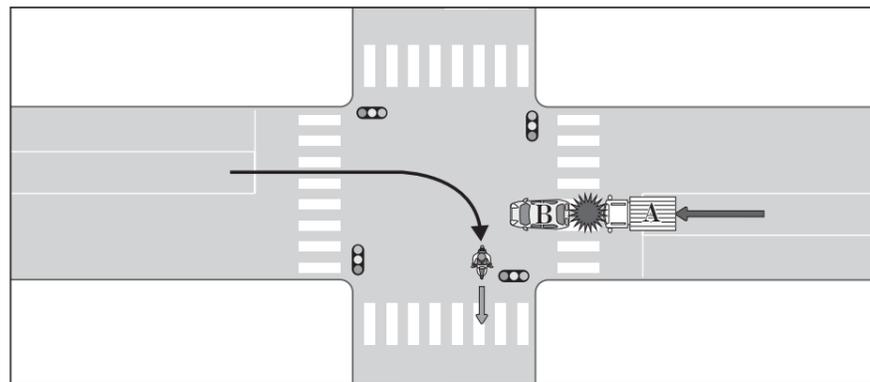


職場における交通安全指導

Part 121

交差点を直進中、前車に追突



■事故の概要

●事故の当事者

運転者 A (中型貨物車) : 40歳代、男性
被害者 B (普通乗用車) : 30歳代、女性

●被害状況

A : 車両前部中破
B : 重傷 (頸椎捻挫)
車両後部大破

●道路状況

片側二車線の県道

事故状況

運送会社に勤務して25年になるAは、中型トラックの乗務経験が豊富なドライバーである。

事故当日は、冷凍食品類を積み込み、県内の取引先への配送業務だった。

Aは早朝に出発。雨が降っており、道路はいつもと違い走行車両も多く渋滞していた。

「今日は、混んでいるな。」と思いながら、ほぼ予定通り最初の配送先へ到着し荷卸しをして、2件目の配送後昼食を済ませたが、その後も渋滞していたため、予定より遅れて3件目の配送先への荷卸しを終えた。

帰社のため、雨で視界が悪い中時速40キロメートルで走行中、前車が対向右折のオートバイに危険を感じて急制動をとったことに対応できず追突してしまい、被害者Bに全治1か月の重傷を負わせた。

事故の原因

Aは、信号機が青であったためBが交差点をそのまま通過すると思い、十分な車間距離を取らずに追従していた。

また、渋滞していたことで予定していた帰社時間を過ぎてしまい焦っていたこと、雨天のため視界が悪く遠方へ視線を向けていて、Bの前方の対向オートバイの存在に気付かず、Bの急停止への対応が遅れてしまったことが、事故の原因である。

安全指導

交差点では、危険回避のため急停止するドライバーも少なくありません。「前車は止まるかもしれない。」と考え徐行や停止体制をとることが大切です。

1. 必要な車間距離の保持

車間距離は、運転車両の速度と相関関係にあり、道路交通法第26条に「車両等は、同一の進路を走行している他の車両等の直後を進行するときは、その前車が急停止してもこれに追突するのを避けることのできる必要な距離を保っていなければならない。」と定められています。

必要な距離とは、車両等の種類、構造、速度、性能、道路(路面)の状況、昼夜の別、見通しの状況、積載量、ブレーキ操作等によって異なるので、常に状況の変化を確実に把握することが大切です。

2. 追突事故の原因

追突事故の主な原因としては、次のようなことがあげられます。

(1) 動静不注視

相手車両の存在をあらかじめ認識していたが、危険はないものと注視を怠った。

(2) 脇見

伝票や外の景色を見ていた、携帯電話の使用、カーナビの操作など。

(3) 漫然運転

考え事をしていて、疲れていてボーっとしていた。

(4) 車間距離不足

必要な距離をとっていなかった。

(5) スピードの出し過ぎ

停止や回避できる速度で走行していなかった。

今回のケースは、雨で視界も悪く路面も滑りやすいなど悪条件が重なり、見落としや発見遅れ、スリップが起因する交通事故が予想されるため、ドライバーとしては危険意識を強く持ち、慎重な運転を心がけるべきでした。さらに帰社時間が遅れることによるドライバーの心理的「いそぎ」「あせり」から「前車はそのまま進行するだろう。」という勝手な思い込みが生まれ、周囲の交通の流れに対する配慮を失ってしまい、自分に都合よく考えてしまう勝手な「だろう運転」につながってしまいました。

3. 追突事故の防止策

(1) 「急ぎの心理」に注意

「急ぎの心理」は、だれでも潜在的に持っているものです。

①最初から急ぐケース

②予定が狂って途中から急ぐケース

③運転中に発生する事象によって急ぐケースが挙げられます。

突発的な「急ぎの心理」は、急ぐ必要のない時でも何かのきっかけで起こり得るため、十分な注意が必要です。常日頃から、突発的な「急ぎの心理」を念頭に置き、自分を客観的に見つめる事ができるように習慣づける必要があります。

(2) 危険を予測した運転

日常業務の中で相手の運転行動が自分の予測と違った場合には驚いてしまいがちですが、これは危険予測が十分にできていない証拠です。相手がどのような運転行動をとったとしても対応できるよう準備しておきましょう。

その際は、「〇〇するだろう。」ではなく「〇〇するかもしれない。」と常に相手の動きを読む運転を心がけましょう。

(3) 十分な車間距離の確保

先を急ごうとして、前車との距離を詰めるドライバーがいます。しかし、距離を詰めたところで目的地に到着する時間が短縮されることは、まずありません。

車間距離を詰めても良いことは何もなく、今回のような追突事故になる危険性が増すだけです。前車との適正な車間距離を保って走行するよう心掛けてください。

(4) コメンタリー運転の実践

運転において最も大切なことは目の前で起きている状況を正確に把握する「認知」です。声を出して安全確認を行なうコメンタリー運転は、認知ミスを防止するためには有効な手段と考えられています。